

4. あとがき

1998年に委員会活動を始める当初、性能設計と言うテーマでどれほどの委員が集まるか？正直なところ危惧していました。しかし、委員としてこの部会に参加していただける方も予想以上に集まり、また活動内容についても、各委員の方々が、よくここまでやっていただけるなど感心するぐらい熱心な活動が行われました。委員会においてほとんど全ての委員が話題提供者といった感じで活動が行われるというのはなかなか無い経験で、一緒にその輪の中に参加でき、私個人としては非常にenjoyさせていただきました。お世話になりました部会長の杉山先生ならびに委員の方々に感謝致します。

このように、各委員の方々がやる気を出して取り組んでいただけた理由は何かと考えると、たぶん次のようなことではないかと思えます。

まず、参加していただいた委員の方々は「設計」を職業としておられる訳で、その飯の種となる「設計法」そのものに非常に興味があった、ということです。当然のことですが、日々の仕事を通して「設計」に関しての「考え」や「思い」といったものがあり、そういったものが各委員を能動的に動かしたのではないかと思えます。

また、活動の初期において建築分野の性能設計の取り組みを委員全員で勉強し、部会として1つの頭を持ち得たというのも非常に有効だったと考えます。しばしば言葉の定義が噛み合わず議論にもならないか、もしくは言葉の定義のみで終わってしまうことが、性能設計の議論ではあり、そういったことに陥らなかったのは、非常に良かったと考えます。この点で、杉山部会長の部会の運営方法は巧妙だったと思えます。

最後に、国際化、道路公団を始めとする示方書にとらわれない設計、コスト縮減といった時代背景もおそらく大きな影響があったと考えられます。しかし、このところの風潮では「性能設計の導入」＝「コスト縮減の方策」といった思惑が強すぎるような気もします。基本的には性能に着目し、より合理的な設計を行うというのが性能設計の本質と考えます。コスト縮減に偏ったいびつな期待によって性能設計の本質がねじ曲げられないように、性能設計を見守っていきたいと考えています。

2000年6月
奥井義昭